

成果報告書

報告者：政策・メディア研究科修士課程 佐野風史

活動名称：ソロモン諸島におけるワントク意識と音文化に関する調査

活動期間：2/12-2/20（飛行機の遅れから予定より1日伸びました）

活動場所：ソロモン諸島ホニアラ近辺

活動概要

本研究活動は、ソロモン諸島をフィールドとし、異なる地域における音風景の特徴を明らかにすることで、同国における音文化の多様性を理解することを目的とする。本研究では、音を単なる物理現象として捉えるのではなく、人々の生活や文化と深く結びついた、社会・文化的現象として捉える。その上で、音環境、音に対する認識、音の意味づけという3つの側面から音風景を総合的に調査し、各地域の音文化の特質を明らかにすることを目的とする。

現地での調査

① 現地住民へのインタビュー

質問表をもとに、ソロモン諸島の状況に合わせて修正を加えたインタビュー調査票を作成し、それを元にインタビューを行った。対象となったのは、ゲラ島ハロロ村に住む男性2人、ホニアラ（ガダルカナル島）に住む男性2人女性1人である。誌面の都合上全てのインタビュー内容を載せることはできないが、鳥や風、竜巻などの音が挙げられ、自然豊かなソロモン的な特徴を実感すると共に、島特有の言い伝えを確認できた。また、車などの機械音等から、対極的な都市化の流れを見てとることができた。

② 音環境の記録

森の中、住宅街、海沿い等、約6ヶ所で録音を行った。

③ 宗教儀礼や日常生活の観察

今回のフィールドワークでは、教会での礼拝や、地域に根付く伝統的な儀式を観察する機会に恵まれなかった。一方で、生活の中で見られた特徴的な音は「ツウー、ツウー」と舌打ちをする時の口で息を吐いたような音が挙げられる。合図的な側面が強いが、これは、人を呼ぶときや、バスから降りる時に使われていた。

考察

音に関するインタビューでは、全体的に、鳥の鳴き声や伝統的な楽器であるパンパイプの音などを好む傾向にあった。一方で、人混みや機械音などに嫌悪感を感じており、自然を大切にしていると考えられる。また、多くの場面で、鳥や風の音をよく聞き、天候や食糧となるものの活動を観察しており、手掛かりとして音が活用されていると言えるだろう。ゲラ島のインタビューでは、鳥の鳴き声が人の死を伝えるという言い伝えが共有されていることがわかった。今回は多くを比較することができなかったが、島ごとに異なる言い伝えが存在している可能性があると考えられることでもある。

今後の展望

今回のフィールドワークでは、期間の半分の間体調を崩してしまい、計画通りの活動とはいかなかったが、興味深い示唆は得られた。ソロモン諸島にいる関係者との連帯を強めつつ、再度調査する機会を設け、より詳細な調査を行えるように努めたい。

謝辞

本研究は、SFC 学会様からの貴重な助成を移動費の一部に充てることで、実りある調査活動を行うことができました。ここに深く感謝申し上げます。また、ソロモン諸島における現地調査では、安藤様をはじめとする関係各位に多大なご協力を賜りました。現地での調査アレンジ、通訳、現地生活者の方々のご紹介など、フィールドワーク遂行に不可欠なサポートをいただき、心より感謝申し上げます。この調査にご協力いただいたソロモン諸島の皆様、関係者の皆様にも、深く感謝いたします。